

天塩川下流における地元NPOと 連携した鳥類調査について

留萌開発建設部 治水課 青木 二郎
都築 一憲
NPO法人天塩川を清流にする会 本田 善彦

天塩川は北海道の最北を流れる大川で、捷水路工事による河道の直線化や浚渫により多様な河岸が減少するなど、過去の様々な営為の影響により河川環境が変化している状況にある。

天塩川下流の自然環境を把握する上で、生態系の最上位種である猛禽類のオジロワシやオオワシを調査することは有効な手段である。鳥類の移動性、季節性を考慮すると、従来の調査方法ではそれらの生態を把握するまでには至らず、連続的な調査が必要である。

本研究発表は、地元NPOと連携して猛禽類を初め渡り鳥などの調査手法及びその成果を発表するものである。

キーワード：自然環境、地域連携

1. はじめに

天塩川は、その源を北見山地の天塩岳に発し、士別市及び名寄市で剣淵川、名寄川等の支川を合流し、山間の平地と狭窄部を蛇行しながら流下して中川町に至り、さらに天塩平野に入って問寒別川・サロベツ川等の支川を合わせて天塩町において日本海に注ぐ、幹川流路延長 256 km、流域面積 5,590 km²の一級河川である。

下流部は、天塩平野、サロベツ原野など広大な平地の中を大きく蛇行しながら緩勾配で流下し、河口付近でサロベツ川を合流しており、旧川（三日月湖）や沼（海跡湖）もみられる。

利尻・礼文・サロベツ国立公園内の湖沼は渡り鳥の休息地となっているほか、サロベツ川一帯はミズゴケ類が分布する高層湿原であり、貴重な生物種の生息環境となっている。汽水域である本川下流では、多様な生物の生息が確認されており、豊かな生態系が形成されている。

貴重種としては、天塩川やサロベツ川には日本最大の淡水魚であるイトウ(環境省 RL 絶滅危惧 B 類、北海道 RDB 絶滅危惧種)が生息している。また、鳥類は、道内では天塩川下流と道東でのみ繁殖するオジロワシ(環境省 RL 絶滅危惧 B 類、北海道 RDB 絶滅危惧種、国指定天然記念物)をはじめ、越冬及び渡りの中継地とするオオワシ(環境省 RL 絶滅危惧 類、北海道 RDB 絶滅危惧種、国指定天然記念物)、オオヒシクイ(環境



イトウ

環境省RL絶滅危惧IB類
北海道RDB絶滅危惧種



オジロワシ

環境省RL絶滅危惧IB類、北海道RDB絶滅危惧種
国指定天然記念物、国内希少野生動物種
天塩川やサロベツ川に生息している。天塩川下流ではシベリアから越冬で飛来する。

省 RL 準絶滅危惧、北海道 RDB 希少種、国指定天然記念物)、チュウヒ(環境省 RL 絶滅危惧 B 類、北海道 RDB 絶滅危急種)等がみられる。

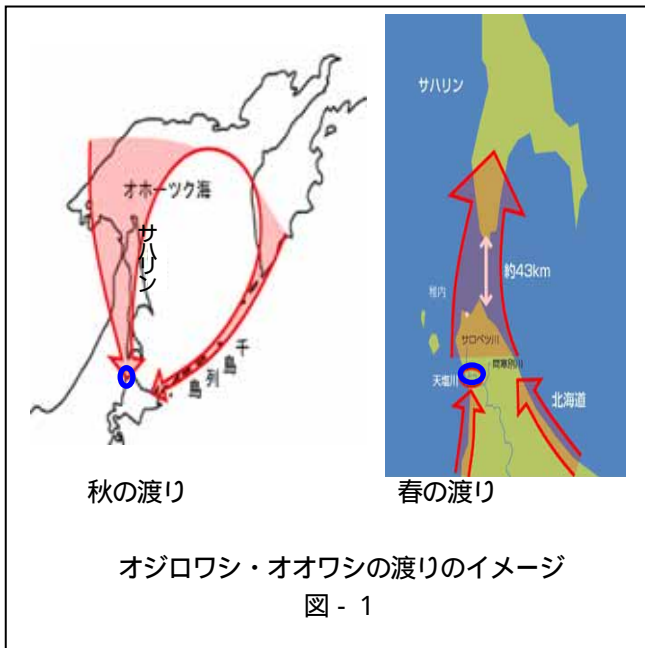
2. 天塩川下流域の渡り鳥の位置づけ

今回の調査目的の一つである猛禽類のうち、特に注目するオジロワシ・オオワシにとっての天塩川下流域を述べる。

オジロワシは、極東・北ヨーロッパを主な生息箇所であり、およそ6,000羽ほど生息していると言われている。天塩川下流域では、毎年数百羽が本州の越冬地へ向かう中継点として活用しているほか、留鳥としても数つがいが生息していることも確認されている。

オオワシは、環オホーツク圏のみに生息し、およそ6,000羽ほど生息していると言われている。サハリンからの越冬個体の100%は北海道に飛来し毎年千羽を超えるオオワシが中継地として活用している。オオワシの1日の移動距離はおおよそ40km~50kmと言われ、秋の渡りでは日本の玄関口となり、春の渡りでは最後の休息地として活用されている。

天塩川下流部は、道北に有る河川の中で唯一結氷しない河川であり、早春、ロシア極東へ渡るオオヒシクイやカモ類、繁殖地へ向かうために集まったオジロワシ、オオワシの重要な餌場となっている。



3. 従来の鳥類調査の問題点について

生態系の上位を占める猛禽類を継続的に調査することは、天塩川下流域の環境、生態系を知る上で非常に重要である。

従来の水辺の国勢調査の鳥類調査手法としては、平成17年度まではラインセンサス法・定点記録法の併用、平成18年度からはスポットセンサスが用いられている。

Aoki Jirou Thuzuki Kazunori Honda Yoshihiko

ラインセンサスは、歩きながら調査線周辺に出現する鳥類を双眼鏡や姿鳴き声で確認する方法である。

定点記録法は、調査地点に留まり1調査地点あたり30分程度双眼鏡等を用いて周辺の鳥類を確認する方法である。

スポットセンサス法は河川縦断方向に1km毎に調査地点を設け周辺の鳥類を確認する方法である。

ラインセンサス法による、調査の精度が高いと言われているが、調査に時間が掛かることから天塩川全線を調査すること困難であり、他の調査方法では、調査地点間の見落としが生じるおそれがある。

また、鳥類の行動は、天候・気温・時間に左右され、一概に春の渡りと言っても、種類によっては渡りの時期がずれることから、従来の調査方法である季節毎に1回程度では、未確認鳥類が生じる。

さらには、従来の調査方法では鳥類が確認されたか否かの確認に留まり、その鳥類が天塩川をどう利用しているのか実態の把握までは至っていない。

これらの問題を解決するためには、長く地元に住む住民の方々による、頻繁な調査がこういった諸問題を解決する方法であると考えた。

4. 地元NPOとの連携について

地元住民と連携するにあたり、野鳥の観察などの活動を実施している団体を探したが、天塩川下流においてはそういった団体は無かった。そこで天塩川下流で河川清掃活動や植樹などの活動を実施している、NPO法人天塩川を清流にする会と連携することとなった。

天塩川を清流にする会は鳥類調査の経験が無いことから、過去の文献、調査結果から天塩川下流に生息する鳥類の図鑑を作成し、各種の特徴見分け方の勉強会を開き、さらには野外において観察方法の勉強会などを実施し、鳥類調査の理解を深め実際の調査に入った。



勉強会の様子

5. 調査手法について

調査は3人程度でチームを編成し、車の徐行移動による調査とし、ラインセンサス法に準じた調査手法を用いた。移動中に鳥類を確認した場合下車し、双眼鏡等で種類、数の調査を実施した。車の徐行移動のため、一般道は走行せず、河川公園内道路及び築堤上を移動した。

調査範囲は、河口部から15 kmまでの範囲とした、この区間は、多数の猛禽類が確認されている箇所であり、渡り鳥の休憩場所と利用されている旧川を含む、汽水域である。降雪後は築堤上の走行が無理なため、河口部の河川公園のみの観測とした。河口部周辺は冬期でも結氷しないため、オジロワシなどが盛んに活動する箇所である。

調査頻度は週1回、秋の渡りのシーズンには週2回に増やし、鳥類の活動が活発になる早朝に実施した。週2度調査することにより、渡りの始まりと終わり、ピークを押さえることが可能である。

調査票には観察日時、観察時間、天候、気温、観察者を記入し、調査中に出現した鳥類について種類、記入した。カモ類など判別が難しい場合には、単にカモ類記入した。さらに気づいたことを自由に記入する欄を設け、鳥類にかかわらず日々の生活で気がついたことを記入してもらった。



6. 調査結果について

昨年の8月上旬から始まった調査は現在も進行中である。提出された調査票も数十枚になり、有識者の助言を受けながら整理中である。

11月の中間取りまとめ結果では、1回当たり確認された種は15種～20種程度であった。全体で確認された種については、詳細な整理が終わっていないが、概ね50種あまりが確認されている。

今回調査で1回当たり最大20種確認されている。過去に実施した同箇所でのラインセンサス法で1回に確認された種は、最大33種確認され、調査年度、時期が異なるなど一概に比較は出来ないが、若干観測種数が劣る結果となった。しかし、今後調査を継続することにより観測精度向上は期待できる。

海が近いこともあり、カモメ類は全ての調査で確認され、次に出現頻度が多かったのはオジロワシであった。留鳥として留まっているオジロワシのつがい数組いることは確認されたいが、出現頻度から天塩川が生息環境に大きく関わっていることが確認された。

スズガモやオオハクチョウなど冬鳥の渡りはじめの時期が記録に残り大きな成果であった。

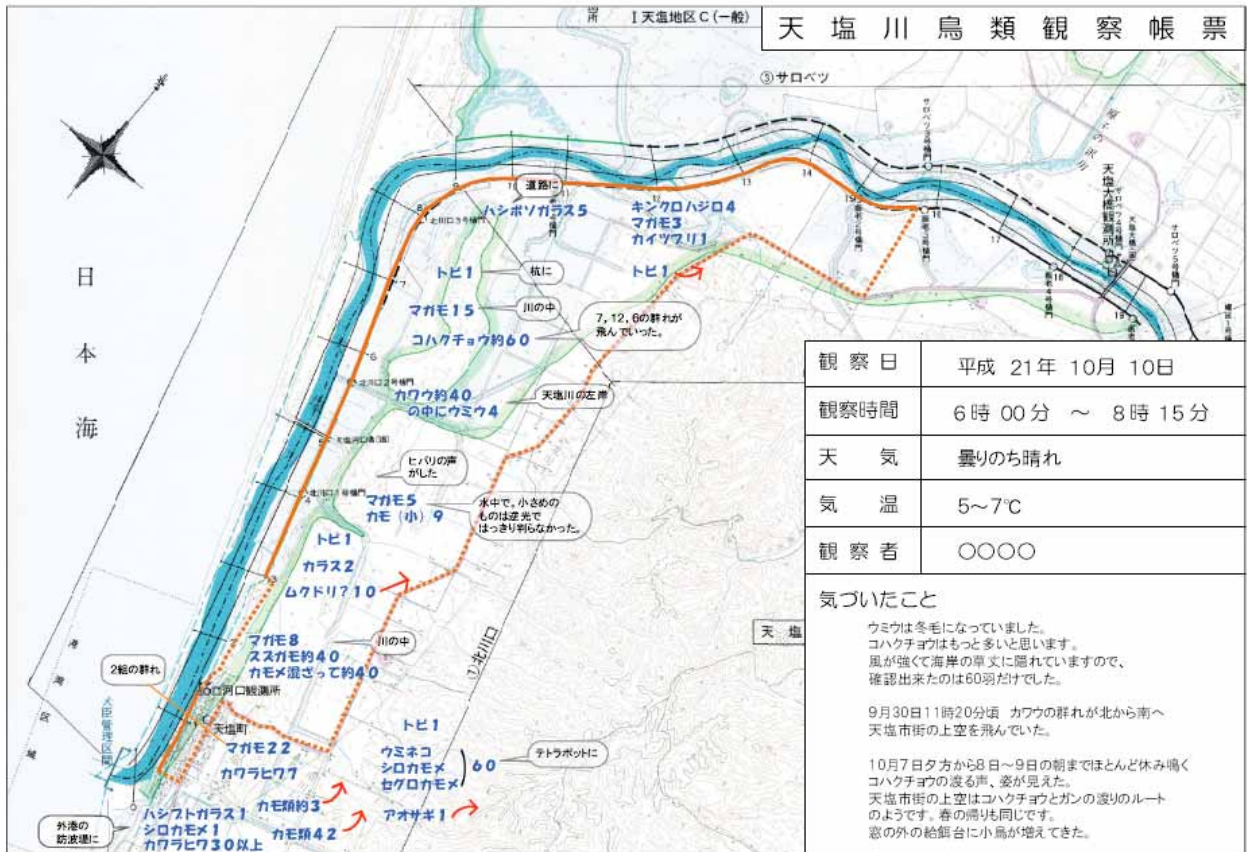
調査状況などを見ると、参加者が楽しみながら実施していることが伺える。



調査状況



撮影されたオジロワシ



提出された調査票 (校正後) 注: オジロワシなどの貴重種に付いてのデータは削除しています

おわりに

今年度の途中から始まった鳥類調査は、お互い手探りな状態ではじめられ、今後も調査方法や調査票の改良など多くの改善点があると考えている。しかし、重要なのは観測する方々の負担が過度にならないことであり、楽しみながら調査を行えることである。

また、過去に野鳥の会で活動していた方が、天塩川を清流にする会にいたことは非常に頼もしい存在であった。天塩川を清流する会では独自に、そういった方を中心に勉強会を開くなど積極的に活動をしている。

有識者の方からも、今後も継続しモチベーションの維持することが重要であることを助言を受けている。

今後は、河川清掃や植樹に積極的に参加し、調査成果発表会などを開催し更なる連携の強化に努め、持続した調査を考えている。

謝辞: 今回の鳥類調査手法にあたり、天塩川汽水環境検討会の齊藤慶輔委員(猛禽類医学研究所)および関係者の皆さまには、ご指導をいただきましてありがとうございました。ここに謝意を表します。

参考文献:

1) 森岡照明ほか「図鑑日本のワシタカ類」(文 総合出版)